

教育事務所だより

平成 27 年 9 月 30 日発行

心惹かれる組織

調整監 木下 雄介

「このメーカーの車に乗りたい」

私事でたいへん恐縮ですが、この夏、車を購入しました。子どもたちが家を離れ、これまでの車がライフスタイルに合わなくなったことが買い替えの理由のひとつですが、購入を決断させたのは、その自動車メーカー（以下A社と呼びます）の車に乗りたいという思いです。学生時代にA社でアルバイト（トンネル様の塗装のラインで、へらとシンナーを手に脚立に上がり、壁面の塗料を落とす仕事でした）をしていましたので、応援したい会社ではありましたが、これまでA社の車を買ったことはありませんでした。しかし、今は私にとって本当に魅力あるメーカーとなっています。

A社は自動車会社としては小さい会社ですが、他社とは異なるアプローチで、環境性能の高い、しかも走行性能も高い車を次々と発売しました。「他社に比べて圧倒的に少ないリソースで、なぜこんな開発ができたのか？」と問われるそうです。その答えは、常務執行役員・人見光夫さんの著書『答えは必ずある』（ダイヤモンド社）に見ることができます。

選択と集中 ヘッドピンを探す

この本では、選択すべき課題として「ヘッドピン」という言葉がたびたび使われます。多くの課題の中から、主要な共通課題と言えるもの、これを解決すれば他の課題も連鎖的に解決されるもの、ボウリングで言えば1番ピンに当たるものを見つけ、それに集中しようというわけです。この手法によってA社は少人数による開発を成功させました。山のようにある課題は本質的につながっているとイメージし、たくさんあるからと諦めるのではなく、1つに集約するような見方をしてきたのです。

リーダーはロードマップを描く

人見さんは、開発は「究極の姿を描いて、そこに至るロードマップを描くということに尽きる」と言います。例えば、エンジンの燃費改善のために、エネルギー損失には何があるかを整理し、こ

れらを制御する因子を考え、3つのステップで理想に近づくロードマップが描かれました。そして、ゴールとロードマップをメンバー全員と共有化し、「ここまで来たら、次はここだな」とみんなが自分たちの居場所と次に進む方向がわかるようにしました。

「できない」とは言わない

難しい課題に直面したとき、ベテランと言われる人の中には、若い人に対して、あるいは外に向かって「できるわけない」と吹聴する人がいるそうです。私もこんな方を見てきたように思いますし、自分もその一人だったと思います。『できない』と一度言えば、できないことを願うようにさえなってしまう。答えは必ず見つかる。そのために、専門性や経験を総動員せよ。」

A社の車は画期的な技術が使われているわけではなく、従来から知られている技術を、常識に囚われないで組み合わせただけだと言います。魅力ある車を生み出し、会社を存続の危機から脱却させたのは、優れた組織マネジメントだったといっても過言ではないと感じます。そして、その組織の中で情熱をもって理想を追い求めるエンジニアの姿を思うとき、このメーカーの車のオーナーとなった喜びが沸き上がるのです。

答辞「この学校の象徴は…」

一昨年度と昨年度、飯南高校の卒業式に出席させていただきました。答辞を述べた代表は、二人とも「象徴」という言葉を使い、同じ思いを語りました。「飯南高校の象徴は、生徒のために親身になって指導してくださる先生方です。」車のメーカーの話を書いていたはずなのに、最後に心に浮かんできたのは、この2人の言葉でした。

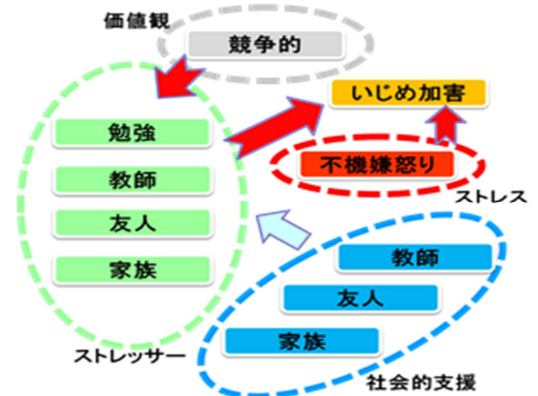
ものづくりと人づくりを同様に考えることに危険はあるとしても、組織としての在り様は学校においてもその魅力を決定づける大きな要素だと思います。理想を共有し、皆がそれに向かってぶれることなく突き進む。解決すべき課題を絞って共有し、自分の得意なことを生かしながら、誰も諦めることなくチームで解決を図る。そんな学校は、子どもたちにとって、そして教職員にとっても魅力溢れる学校となるに違いないと思います。

いじめの加害・被害を生まないための未然防止の取組を！

国立教育政策研究所発行の「生徒指導リーフ8～いじめの未然防止～」では、いじめ加害に影響する要因を次のようにまとめています。

児童生徒をいじめ加害に向かわせる要因として大きいのは、「友人ストレス」「競争的価値観」「不機嫌怒りストレス」の3つ。それらの要因が高まると、加害に向かいやすくなる（リスクが高まる）。リスク要因が実際にいじめ加害に結びつくには、偶発的な要因（適当な相手と適当な方法）が必要であるが、3つの要因の改善が、いじめ発生リスクを減らすことは間違いないと考えられる。

いじめ加害に向かわせる要因間の関係モデル



出典：国立教育性先研究所生徒指導研究センター「いじめ追跡調査 2007-2009 いじめQ&A」2010年6月

以上の3つの要因のうち、(過度な)「競争的価値観」や「不機嫌怒りストレス」を緩和する上で効果的といわれるのが、授業や行事の中で、どの児童生徒も落ち着ける場所をつくりだす“居場所づくり”の考え方です。学級や学校がどの児童生徒にも安心して居られる場所になっていますか？ 一人ひとりのよさが活かされた学級づくりがなされていますか？ そこから見直すことが求められています。

また、主体的に取り組む共同的な活動を通して、他者から認められ、他者の役に立っているという「自己有用感」を児童生徒全員が感じとれる“絆づくり”を進める（そのための場や機会をつくる）ことができれば、いじめに向かう児童生徒は減ります。

【絆づくりの取組例】

いじめや不登校、暴力行為等に悩んでいたA中学校区では、平成22年度に入学した中学1年生のこれらの問題行動の件数が大きく減りました。これは前年度に校区内の二つの小学校が、6年児童の「自己有用感」を育てるための『お世話活動』に力を入れたからです。6年生が1年生を迎える会を開く、給食の準備や片付けを手伝う、読み聞かせをする、縦割り班で行う清掃・集会活動や運動会などの活動を、年間計画に位置付けて実施したのです。

ここで大切なのは、「何をした（させた）のか」ではなく、「誰の」「何を」育てるために「どのように」取組を行ったのかです。6年生の自己有用感が高まることを期待し、それが実現するように『お世話活動』が実施されました。交流が主目的ではなく、6年生が育つ機会となるように実施され、教師の声かけもそれを促すようになされました。

魅力ある学校づくり調査研究事業

“居場所づくり”、“絆づくり”の代表的な取組が「魅力ある学校づくり調査研究事業」（国立教育政策研究所HP「<http://www.nier.go.jp>」参照）です。松江教育事務所管内では「安来一中校区」が昨年度より2年間の指定を受け、不登校やいじめ等の未然防止を目的に調査研究を進めています。校区全教職員が一体となって、“居場所づくり”として「子どもを中心に据えた授業づくり」を、“絆づくり”として「互いにつながり高め合う集団づくり」に取り組んでいます。

12月4日には研究発表会を予定していますので、たくさんの先生方にご参加いただき、取組の参考にしていただきますようお願いいたします。

地域の力で学校を支援 ～学校支援地域本部

社会教育の力

H27 年度全国学力・学習状況調査 ～質問紙の回答状況から〈学校質問紙より〉～

学校支援地域本部などの学校支援ボランティアの仕組みにより、保護者や地域の方が学校における教育活動や様々な活動に参加してくれる

【小学校】県 91.4% 全国 84.1% (+ 7.3ポイント)
 【中学校】県 80.0% 全国 69.7% (+ 10.3ポイント)

地域の人材や施設の活用について肯定的回答の数値が高い。これを、学力向上に結び付けていく学校の取組が求められる。

地域につくられた学校の応援団

県では、地域住民がボランティアとして学校の様々な活動を支援する仕組み「学校支援地域本部」の取組を推進しています。具体的には、中学校区または公民館等ごとに、中心となって連絡・調整を行う方を「コーディネーター (CN)」として配置し、CNを中心に、地域住民による「学校支援ボランティア」が学習支援や部活動支援、環境整備、登下校安全指導、学校行事支援などを行っています。

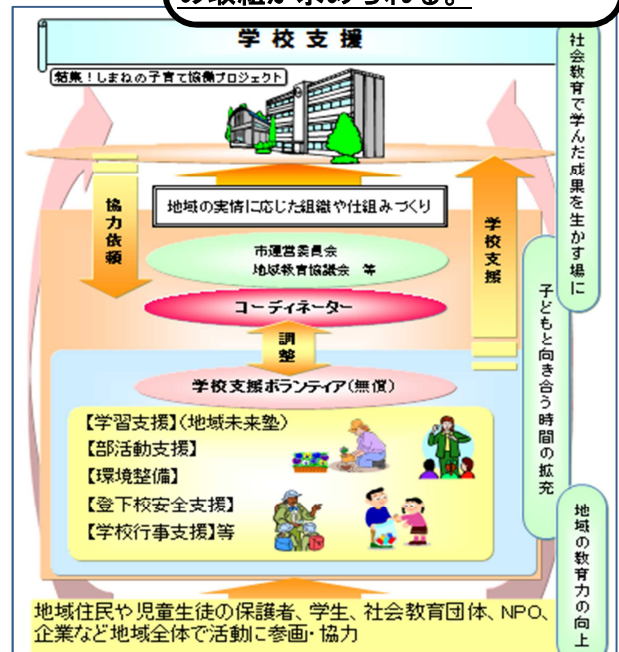
つまりこれは、学校を支援するため地域住民をボランティアとして派遣する仕組み、いわば「地域につくられた学校の応援団」です。

効果的な活用を！

各学校では「ふるさと教育」への取組を通じ、

これまで地域を教育活動に活かしてきました。この取組を組織的なものにし、学校からの依頼と地域の力をより効果的にコーディネートしていくのが学校支援です。地域の実情に応じ、各 CN や公民館等が協力し、地域における学校を支援する体制の整備は進んできています。

では、学校側から見た活用状況はどうでしょうか。学校支援を効果的に生かす一番のポイントは、育てたい子どもの力を明確に示し、我々教師が授業をきちんとデザインすることです。地域の教育資源ありきでスタートしてはいませんか。「地域を（で）学ぶ」いわゆる「ふるさと学習」から、「地域に学ぶ」へのシフトチェンジが必要です。育てたい力を示すことで CN も地域の教育資源との的確なマッチングを行えます。学校は CN と連携することで、個別の交渉や



H27 県社会教育課『社会教育行政の方針と事業』より

打合せの時間を短縮し、地域の教育資源を活用した指導のねらいの焦点化が図りやすくなります。

WIN-WIN の関係

学校支援は決して学校のためだけに実施しているものではありません。学校支援活動を通じてそれぞれが役割を果たし力をつけることで、地域全体の教育力の向上、地域の絆の再生、地域づくりにもつながるのです。



めざす効果の例

※WIN-WIN：双方に得がある



『継続型訪問指導』から ～ニーズに応じた活用～



今年度より実施している継続型訪問指導は、学力育成、授業改善、校内研究等を推進する学校に対して継続的に訪問指導を実施し、学校の主体的・自主的な取組を支援することを目的としています。実施校のニーズをもとに、授業研究のみではなく、研究計画、単元・授業構想、指導案作成等、様々な内容について助言・指導を行っています。

松江市立意東小学校は、今年度、県教研発表（A 確かな学力を育む教育活動）及び学校図書館活用教育研究事業実施（2年目）校で、「自ら学び、自分の思いが相手に伝わるように表現する児童の育成」を研究主題に、国語科を中心教科として校内研究を進めています。今年度は「研究授業の指導案検討から助言・指導を受けたい」というニーズから『継続型訪問指導』を希望されました。

〈意東小学校〉

〈教育事務所（担当指導主事）〉

（5月29日） 授業者・研究主任・司書教諭

◎6年「新聞の投書を読み比べよう」指導案検討

- 日常的に同年代の投書に触れさせており、投書を書かせ、新聞社に投稿させることを目的とした活動を行いたい。
- 教材の投書から構成のよさや説得の仕方を理解し、自分の投書に生かす単元を構想したい。

- 児童にとって投書を書く目的が明確になっていてよい。
- 「読むこと」と「書くこと」を整理して指導する必要がある。

（6月26日） 教職員

◎6年「新聞の投書を読み比べよう」研究授業および協議

- 前時までに投書を読んで学んだことを基に、自分の投書の構成を思考ツールを使って考えるよう工夫した。
- 事前の指導案検討を担当者だけではなく全教職員と共有し、共通理解のもとでさらに研究を深めたい。

- 担任、司書教諭、学校司書の役割分担が明確で、学校図書館が効果的に活用された。
- 言語活動そのものが目的にならないようにしたい。

（8月3日） 教職員

◎4年「広告と説明書を読みくらべよう」指導案検討

- 総合的な学習の時間に取り扱う地域教材「陣幕相撲」を生かし、国語科のねらいを達成できる学習活動を設定したい。
- 教科書教材で目的に応じた表現を理解し、表現するために資料を読み取り、目的に応じて書くことを工夫する単元を構想したい。

- 児童にとって身近な地域教材を取り上げ、目的意識をもたせたことはよい。
- 4年生の指導事項では、事実と意見を区別して読むことが必要である。

先生方は児童の主体的な学習を目指し、図書館活用教育を取り入れたり学校や地域の特性を生かしたりすることを心がけておられます。そして、訪問指導を活用しながら国語の授業で実践しておられます。

2学期以降も意東小学校のニーズに対応した訪問指導を行っていきます。



特別支援教育研修会のお知らせ

日時 平成27年11月26日（木） 14:15～ 会場 松江合同庁舎 601会議室

講演 「インクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進」

講師 国立特別支援教育総合研究所 主任研究員 伊藤 由美 先生

※詳細につきましては、各校に配布いたしました要項をご覧ください。